

II 後期円筒埴輪の再検討

1 後期円筒埴輪の検討課題

川西宏幸による円筒埴輪の大別Ⅰ～Ⅴ群(期)は、その後の研究の進展の中で各群の内容が再定義されながらも、大きくはその枠組みが踏襲され今日に至っている。このうち本研究が対象とする古墳時代後期の円筒埴輪はⅤ群に該当し、主として①円形透孔を1段に2孔、段間では直交する向きに配置する、②窖窯焼成、③外面調整は一次調整のタテ・ナナメハケで、二次調整のヨコハケは省略する、④突帯は扁平化し突出度が低い、⑤底部調整を施す、といった諸属性から定義される。このうち、①はⅢ期、②はⅣ期において整う属性であり、③～⑤がⅤ期に固有のものといえる。ただし、③は比率を問わなければ各群にまたがって通時的に存在する調整手法であり、強いて言えばⅤ期のそれは器面に対して工具の主軸が大きく傾くナナメハケが主体となる。

むしろ④や⑤こそがⅤ期を規定する製作技法として注目されることになる。とりわけ④の扁平化した突帯は、断続的にユビでナデつける貼付技法に本質がある。川西がⅤ期の中でも新相に出現するとした最下段突帯における「断続ナデ技法」は、最下段に限って貼付後のヨコナデ調整が省略されることで現れるいわゆる無調整突帯であることが1990年代に解明された(中島1992、高橋1995)。その後、Ⅳ期の新相にみられる最下段突帯の「押圧技法」も突帯成形時に普遍的に用いられる板押圧の痕跡であり、無調整突帯の一種であることが明らかにされている(藤井2003、藤沢2003)。ヨコナデ調整の有無に限らず、断続ナデによる突帯製作こそをⅤ群円筒埴輪を規定する属性とみる評価(鐘方1992)が定着し、今日に至っている。

一方、底部調整技法については、「畿内」では倒立状態で最下段外面下半を中心に板オサエする手法が基本であり、断続ナデによる突帯成形の出現とはほぼ同時期に出現することが知られる。ただし、一般的な器面調整とは別に最下段下半を限定的に調整する行為は、やはり比率を問わなければ円筒埴輪出現当初から存在する。こうしたⅤ期開始以前の最下段下半の調整行為を「底部の調整」呼んで、底部調整とは区別する意見もある(上田1997)。たしかに底部調整が高い比率で施されるようになるのはⅤ期開始時からであるが、Ⅳ期以前の「底部の調整」と技術的内容に本質的な差が存在するかどうかについては、実態を十分見極める必要があると考える。

いずれにしても、断続ナデ技法による突帯製作と底部調整の盛行は、Ⅴ期の円筒埴輪のメルクマールとなる点は確かである。しかしながら、Ⅳ期とⅤ期の円筒埴輪を整然と識別することは容易ではなく、とりわけ古い技法が遅くまで残存する傾向がある大型品ではその見極めが困難な場合が多い。そうした可能性を考慮して、相対的に型式変化の速度が速い小型品に着目してみても、Ⅳ期新相段階には既にⅤ期的な製作技法の萌芽が認められる反面、Ⅲ・Ⅳ期に特徴的な外面B種ヨコハケ調整はⅤ期の古相段階においてもかなりの高比率で残存する事実があり、Ⅳ期からⅤ期への移行は極めて漸移的、連続的であった状況が明確になってきている。

そこで以下では、今一度、IV期からV期への移行過程を実態に即して理解すべく、突帯製作、底部調整のそれぞれについて、技法の出現過程や細部の変化について詳しく跡付けてみることにしよう。

2 V期開始前後における突帯製作技法の再検討

IV・V群の突帯製作技法については、2003年に提示された藤井幸司による整理が基本的な枠組みとなっている(藤井2003)。藤井は中・後期の円筒埴輪の差に概ね対応する突帯製作技法の相違を大きくI・II群に大別した。その内容を文章化すると

突帯 I 群 [割付]凹線→[貼付]ユビオサエ→[整形]板オサエ→[調整]ヨコナデ

突帯 II 群 [割付]省略→[貼付]ナデ付け → [整形]省略 → [調整]ヨコナデ

となる。突帯II群はいわゆる断続ナデ技法Aによる突帯に該当し(中島1992)、前述のようにV群円筒埴輪の最も重要なメルクマールとなる。ユビオサエによる貼付や板オサエ整形は断片的にはIII期の円筒埴輪において既に認められるので、上記I・II群はそれぞれ中期突帯、後期突帯と呼び分けることもできる。

しかしながら、実際には前者から後者への移行はそれほど単純ではない。前述のように両者にはそれぞれ無調整突帯が存在することに加えて、前者から後者への移行期であるTK23・47型式期には双方の特徴が入り混じった突帯が散見される。藤井はそれらを

I bA ii 類 [割付]凹線→[貼付]ユビオサエ→[整形]省略

I bB i 類 [割付]凹線→[貼付]ナデ付け → [整形]板オサエ

II B i 類 [割付]省略→[貼付]ナデ付け → [整形]板オサエ

の3類型に整理し、まとめて折衷群と呼称した。

藤井が説くように、こうしたI・II群の特徴が混在する突帯の存在は、双方が全くの別系統にあるのではなく、系譜的な連続性をもちつつI群からII群へと緩やかに移行したことを裏付けている。問題を難しくしているのは、先行する痕跡を消すように最終調整のヨコナデが丁寧に加えられた突帯では、その製作手順を正確に把握することが困難な点である。組合せ上は様々な手順の存在が予想されるものの、その相違にもとづいて細やかな系統関係を追う作業は現実的ではない。

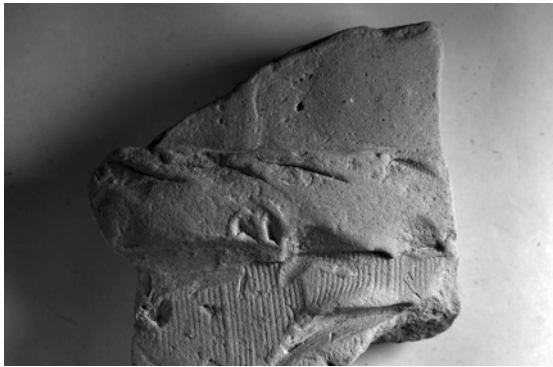
本研究では以上のことを前提としつつ、新出資料の実見も踏まえて検討を進めた結果、V期古・中相段階(TK23・47型式期)には、藤井分類のI bB i 類、II B i 類に該当する断続ナデによる貼付後に板オサエ整形をおこなう突帯がかなり普遍的に存在するとの感触を得た(Fig. 1-1・2)。V期開始時には、断続ナデによる突帯貼り付けが出現するのと同時に急激に突帯の扁平化が進行し、当該期の突帯はむしろV期新相段階より突出が低い印象を受けるが、この点は当該期の突帯製作において板オサエ整形が普遍的になされている可能性を示唆する。加えて、II群の無調整突帯(断続ナデ技法B)のとりわけ初期の事例では、上下のナデ付け単位に挟まれた中央の稜が板オサエにより平坦に整形されたものが頻繁に確認されることも、そのことを傍証する(Fig. 1-3~6)。このようにみえてくると、出現当初の断続ナデ技法では、板オサエ整形をとまなう手順こそが本来のあり方なのであり、これを折衷系と評価するのは妥当ではないということになる。割付の凹線技法が突帯II群においてもしばしば用いられることとあわせて



1 四条10号墳 断続ナデ→板オサエ→ヨコナデ
→L字形工具割付



2 新沢千塚166号墳 断続ナデ→板オサエ→ヨコナデ



3 狐井城山古墳 断続ナデ→板オサエ→L字形工具割付



4 狐井城山古墳 断続ナデ→板オサエ



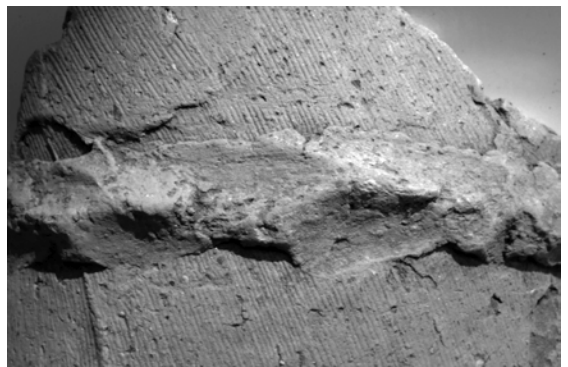
5 北花内大塚古墳 断続ナデ→板オサエ(端面に木目)



6 池田9号墳 断続ナデ→板オサエ



7 四条6号古墳 断続ナデのみ



8 御墓山古墳 断続ナデのみ

Fig. 1 突帯Ⅱ群(断続ナデ技法)の新旧

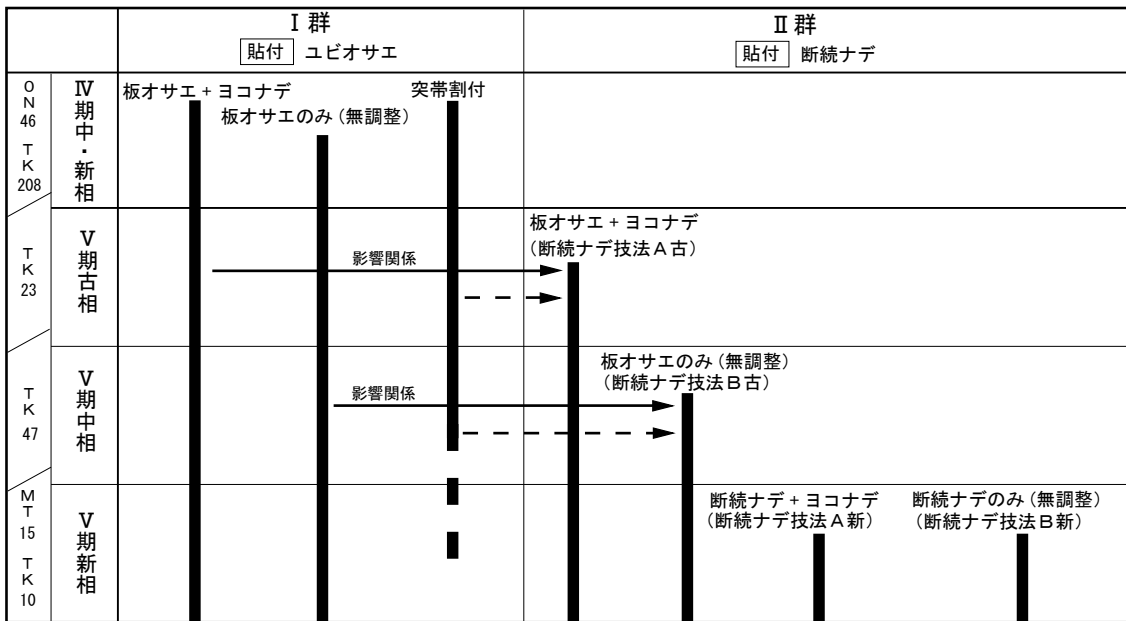


Fig. 2 V群円筒埴輪突帯変遷概念図

(Fig. 1-1・3)、突帯 I 群から突帯 II 群への移行が極めて漸移的であったことがあらためて認識される。

加えて、貼付 ユビオサエ→整形 板オサエによる中期的な突帯は、V 期開始以降も大型品を中心に相当数残存する状況が決定的となってきている点にも注意を要する。今城塚古墳の円筒埴輪の様相が判明したことにより、同古墳では貼付 ユビオサエ→整形 板オサエ→調整 省略の、すなわち無調整の中期突帯が大型品において保守的に残存する状況が明確となったのである(今西編2013)。V 期古相の突帯 II 群が断続ナデ技法を用いつつ、併行して存続する中期突帯の割付技法や板オサエ整形を手順の中に取り込でいくのは、むしろ自然のなりゆきであったことが了解されよう。いわゆる無調整突帯に関して、I 群のそれが IV 期新相に顕在化した後、V 期を通じて存続する図式が描けるようになったことで、その影響を受けて V 期中相以降に突帯 II 群でも無調整突帯が出現していくという系譜的なつながりが描けるようになってきた。

このように、突帯 I・II 群の関係はかつての想定よりも断絶性に乏しく、両者は極めて親密な関係のもとに前者から後者へと漸移的に変遷していったのが実態といえる。むしろその両者の系譜的な関係性に着目することで、やや概念的ながら、その変遷過程を Fig. 2 のように整理することができる。すなわち、従来は II 群無調整突帯(断続ナデ技法 B・Fig. 1-7・8)の出現が V 期を二分する指標として重視されてきたが、板オサエ整形を施す II 群無調整突帯(Fig. 1-3~6)の存在を介在させることにより、突帯 II 群の製作技法の省略化、すなわち断続ナデ技法 A から B への変遷過程は 3 段階に区分できることになる。とはいえ、古い特徴は完全に消え去るのではなく保守的に残存する可能性があるため、少量の資料での位置づけには注意を要することはいうまでもない。

3 底部調整技法の再検討

V 群円筒埴輪を特徴づけるもうひとつの重要なメルクマールである底部調整については、山内英樹の

批判があるように（山内2003・2018）、「円筒埴輪総論」以降、目覚ましい研究の進展がなく、とりわけ「畿内」では研究が大きく立ち遅れている。ここでは、IV期以前の状況にも目を配りながら、底部調整の技術的内容や出現過程について再検討する。

底部調整技法の本質 まず、底部調整の工程上の概要を再確認しておこう。「円筒埴輪総論」によれば、第V期には「小工程を反復せずに基部のうえから口縁部まで一気に巻き上げを行うようになる」ため、「軟弱な状態の底部に急激に自重が加わり」変形が生じるようになる。この変形した部分を「製作工程の最終段階において」倒立して調整する行為が底部調整である（川西1978）。この定義に関して、まず問題になるのは、V期における小工程の消失という理解である。すなわち、円筒埴輪の粘土紐積み上げ単位の変化を追究した藤井幸司の研究により、今日ではV群円筒埴輪においても川西のいう小工程（粘土紐巻き上げ→内外面調整→突帯製作）を複数回繰り返す類型が普遍的に存在することが明らかになっている（藤井2003）。したがって、「小工程」の消失が底部調整出現の直接の要因とは考え難い。筆者は、底部調整の出現は小工程の消失に起因するのではなく、単純に製作時間の短縮化によって自重による底部の変形率が増加したことに要因があると考え。この点は、尾張型埴輪における倒立技法採用の要因が1本あたりの製作時間の短縮に求められている（浅田2004）ことと同様である。

実際には遺物の観察から製作時間の短縮を読み取ることは困難であるが、底部調整が顕在化してくる時期において同技法を用いない個体では、底面が押し潰されたり、基部下端が内外に迫り出すように変



1 自重で内湾した底部



2 自重で潰れた1の底面



3 自重で潰れた底面



4 内側に折れた3の底部下端

Fig. 3 自重で変形した底部（四条7号墳）



円筒埴輪全形（陵南赤山古墳 IV期古相）

左の個体の口縁端部

口縁屈曲部作出前の器壁上端に作業台の木目痕が残る

Fig. 4 口縁端部に残る倒立痕跡

形した事例が多数確認できる (Fig. 3)。こうした状態が底部調整によって補正すべき直接の対象であったこと、さらにはそうした変形が頻繁に生じるほど急ピッチでの作業が求められていた状況を推察できる。逆にいえば、底部調整が顕在化する以前の製作では、底部の変形が生じないよう、あるいは生じた場合はその都度、それを補正できるような、十分な製作時間が確保されていたものと理解できる。上田のいう「底部の調整」は、まさにそうした凶らずとも生じた底部の変形にその都度、丁寧に対処した姿を捉えたものであり、技法として普遍化した状況が見出せないのはそのためと考えられる。

なお、「底部の調整」については、V群における底部調整との弁別を強調するあまり、正立状態で施された簡易な調整行為とみる向きもあるが、少なくともケズリ調整に関しては底面に接するように内外面の下端を調整しており、倒立状態でなければ施工は困難と考えられる。堺市陵南赤山古墳出土埴輪のなかには、口縁端部（実際には口縁端部の屈曲部分を作成する直前の器壁の上端部分）に作業台の木目が付着したものがあり、製作工程の途中ないしは終盤に埴輪を倒立する工程があったことがみてとれる (Fig. 4)。その目的は、必ずしも底部調整のためだけではなく、重力に即して底面付近に移動する水分を乾燥させ、予め自重による変形を抑止することにあつたことも十分考えられる。そうした配慮にも関わらず変形してしまった底部に対して、手厚く調整を加えたのが「底部の調整」の実態とみられる。このように底部調整は、円筒埴輪の製作工程に本質的に内在する倒立・乾燥工程をも含む底部の変形への対処にその本質があり、痕跡としては十分可視化されないものの、その作業自体はIV群以前の円筒埴輪の製作工程に

も本来的に組み込まれていたものと考えられる。現象として把握されるいわゆる底部調整の出現は、製作時間の短縮化にともない製作工程全体が粗雑化することにより、「底部の変形への対処」がより目視可能な技法痕跡として顕在化した状況をとらえたものと理解できる。

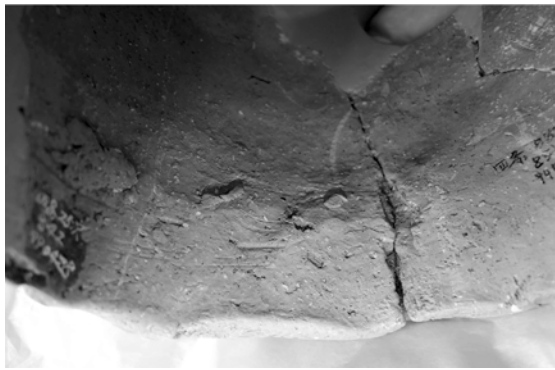
出現期の底部調整 底部調整が技法痕跡として明確化、顕在化してくるのはV期に先立つIV期新相、須恵器編年ではTK208型式期のことであり、外面調整ではB種ヨコハケが未だ高い施工率を維持し、断続ナデによる突帯製作（突帯Ⅱ群）の出現よりもやや先行する時期に相当する。出現期の底部調整には、後に「畿内」で通有となる板状工具による外面のオサエ調整のほか、ユビないしは柔軟性をもった何らかの工具によるオサエないしはナデ、さらには内外面の端部や底面を不定方向にケズリ取る、などの各種手法が用いられる（Fig.5）。ケズリは内外面下端に迫り出した粘土の除去、および底面の乱れを修正する目的で施されたとみて間違いない。これに対してオサエは、自重により内湾した器壁をユビ単独ないしはユビと工具ではさみ込み外方へ圧力をかけることで、器壁を当初の直立状態へと戻すことを意図した作業痕跡として理解できる。重要なのは、各種手法が同一個体中において、しばしば複合的に用いられている点である。最も一般的なのは板・ユビオサエとケズリの複合であり、前者を外面、後者を内面で使い分ける場合や、同一面において両者を重複させる場合などがある。

底部調整の研究を精力的に進めてきた山内英樹（山内は「基底部調整」と呼ぶ）は、倒立状態で施される底部調整について、Ⅰ工程：外面板オサエ・タタキ、内面ユビオサエ等、Ⅱ工程：Ⅰ工程により波打った表面をハケやナデ整える、Ⅲ工程：端面のカット、ないしはケズリによる内外面の面取り、の3工程に弁別するが（山内2003b・2018）、技法に複合化が認められる「畿内」における出現期の底部調整の手順は、必ずしもそうした順序に沿っていない。

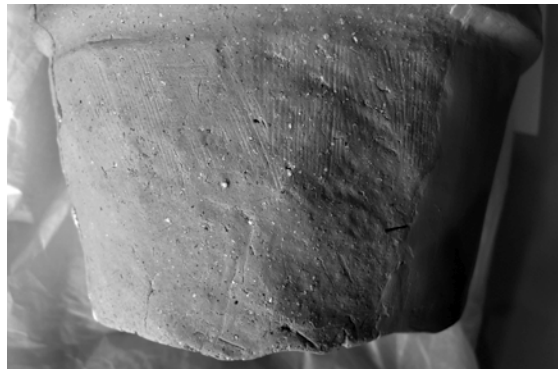
そもそも上記の山内の整理は、山内や大谷晃二による山陰地域の底部調整の工程復元にもとづいている（大谷2003、山内2003a）。山陰地域の底部調整は、Ⅰ工程のタタキ調整に円・角柱状の当具を使用する点や、Ⅲ工程の底面の倒立カット調整が時間の経過に沿って省略化されていくなど、地域的個性が強い。一方、「畿内」の出現期の底部調整の場合、ケズリは底面の「カット」のみならず、内外面の下端にも施される場合が多い。底面付近の粘土の乱れを簡便に修正し得る方法であり、単独で施される場合に加えて、板・ユビオサエに先行して工程上の初期に施されたと判断できる事例も多い。板状工具やユビによるオサエが重複することによりケズリによる砂粒の動きを視認することが困難な場合が多いが、板オサエの単位とは別に器壁が極端に薄くなり尖底状を呈する事例については、かすかに砂粒の動きを観察できることがあることから、先行してケズリ調整が加えられている場合が多いものと推測される。

このようにケズリ調整が工程の初期に端部付近に限定的に施されるのに対して、板オサエは、そのみでは改善し得なかった自重による器壁の変形を直立形状に戻す目的で施されたものとみられる。山内は板オサエとタタキを「(倒立状態で) 工具によって表面に力を加える」調整行為として同質に捉えた上で、タタキの方が「遠心力が応用でき、粘土に大きく力を伝えることが出来るので、より広く長い範囲に、強く調整を施すことが可能」とする（山内2003b）。しかしながら、板オサエ調整の主目的は、タタキのように外面からの圧力に主体を置いて器形を変形させるのでなく、むしろ外面にあてがわれた板状工具を支持具とし、内面からユビで器壁を折り返すように圧力をかけて、内側に折れた器形を本来的な形状に戻そうとすることにあつたものと考えられる。

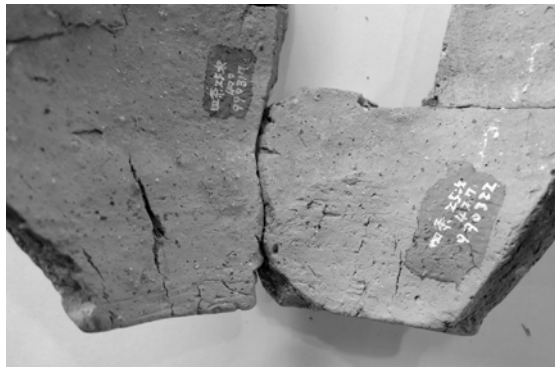
II 後期円筒埴輪の再検討



1 内面ケズリ (四条7号墳)



2 外面板オサエ (1の外面)



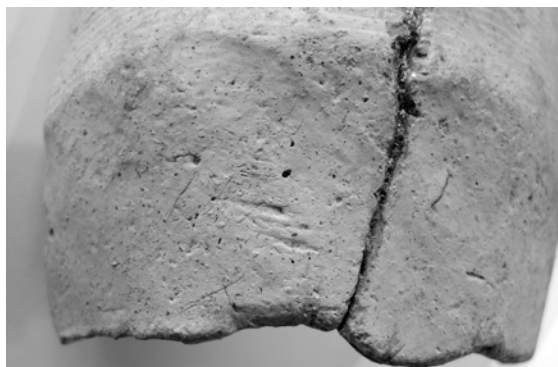
3 内面ケズリ (四条7号墳)



4 外面ユビオサエ (3の外面)



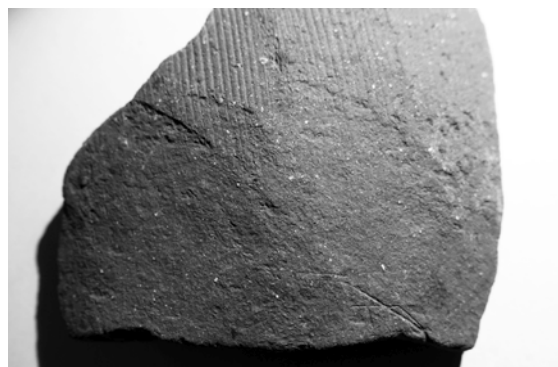
5 底面ケズリ (3の底面)



6 外面ケズリ→ユビオサエ (四条7号墳)



7 丸みのある工具による外面オサエ (四条10号墳)



8 外面ケズリ→板オサエ (林10号墳)

Fig. 5 出現期の底部調整

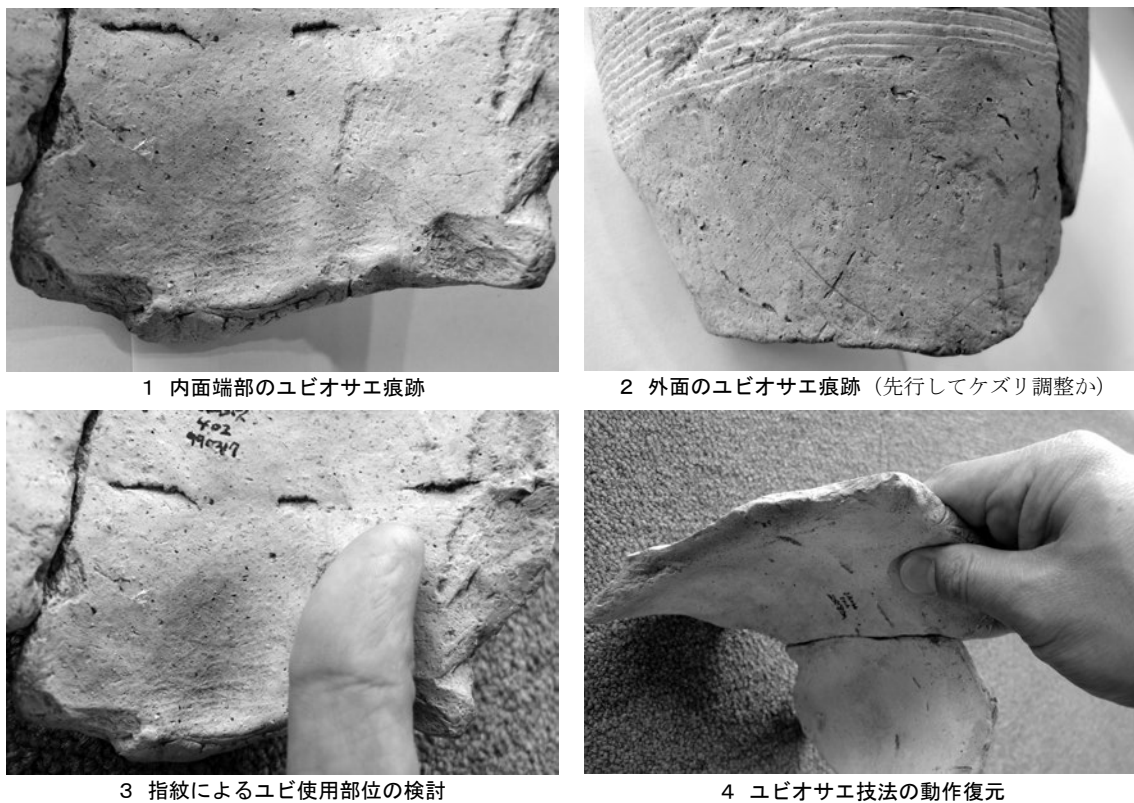


Fig. 6 底部調整ユビオサエ技法の復元（四条7号墳）

これについては川西宏幸が「円筒埴輪総論」において、「畿内の一般的な底部調整技法」を解説するなかで当初からその本質を鋭く指摘している点があらためて注目される。すなわち、川西は「底部付近の内面に拇指をあて、残る指を外面上において、内外両面からはさむようにして底部付近に押圧を加える。そのさい、外面の押圧は指で直接行わずに、板状の工具を用いる」とし、いわゆる板オサエ調整の主眼が内外面をユビではさんで器壁を変形させることにあることを的確に指摘している。タタキでは、内面にも当具を用い外面から強く叩打することで、乾燥が進んだ器面を変形できる。しかしながら、「畿内」に通有の板オサエではタタキに対応するような内面の支持具痕跡は認められず、ユビオサエの痕跡は下端付近にのみ集中して残る。仮に外面の板オサエ痕跡が一定の叩打作業によるものであった場合、打力の強弱に関わらず内面下端のユビオサエのみでは外面からの圧力を支持することは困難である。やはり板オサエ調整の主眼は内面側からユビで器壁を外側に折り返すことにあり、板状工具の方がその支持具的な役割を果たした蓋然性が高いといえる。出現期の底部調整では板を介さずに直接ユビで内外面を掴んで器形を変形させているとみられる事例が散見できる点は、そうした理解を傍証する（Fig.6）。外面に板をあてがうのは、外表面にユビの形状を残さず広範囲に一定の圧力を加えるためであろう。

ただしそのような技法復元に対しては、底部付近の乾燥状態が問題となる。乾燥が進行し硬化した器面に対しては、ユビによる押圧のみでは形状を変化させることは不可能と考えられる。この点は従来ほとんど議論されてきていないが、「畿内」の通有の埴輪では、それを回避するために倒立時に湿った布を被せ、一旦乾いた底部に適度な水分を与えることで、変形を可能とする工夫がなされているものと理解できる。内面のユビオサエ部分には目の細かい織物の痕跡が頻繁に確認できる点はその証左であり、

湿った布を被せた上からユビオサエが加えられる場合があったことがみてとれる。また、時折、外面の板状工具の圧痕付近に集中して散見される粒状の凹凸も布目の圧痕とみられ、底部の広範囲に布が被せられた状態で板オサエ調整がなされた様子がうかがえる (Fig. 7)。布目の圧痕が底端部付近ではほとんど散見できないのは、器面が一旦乾燥し硬化した後に布が被せられたためであり、布目が付着するのは押圧により器面に強く押し付けられた部分のみと考えられる。布目の圧痕は常に視認できるわけではないため、布を取り外した段階で底部調整が加えられる場合もあったとみられるが、いずれにしても「畿内」の通有の円筒埴輪では、底部調整に際して倒立状態で布を被せて乾燥した器壁に再度水分を与える工程が存在したとみて間違いない。

底部調整の時間的变化 底部調整は、V期開始の重要なメルクマールとして、今後も重視されるべき指標であるが、前述のように、実際にはB種ヨコハケが高い施工率を維持する段階において顕在化してきている。川西も「円筒埴輪総論」のなかで、「底部調整を行うこともまた、V期を画する重要な特徴である」としつつ、「もし外面に二次調整があっても、底部調整がみられるばあいには、これをV期にあてたい」と底部調整の方を指標として重視する姿勢を示した。V期 (V群) の定義については、外面調整よりも底部調整のあり方を優先すべきとの意見は同感であるが、前述した突帯製作のあり方や底部高・突帯間隔、共伴する形象埴輪の内容も踏まえて、総合的に把握すべきと考える。

奈良盆地における底部調整出現期の資料としては、橿原市四条7号墳が標識的な存在である。B種ヨ

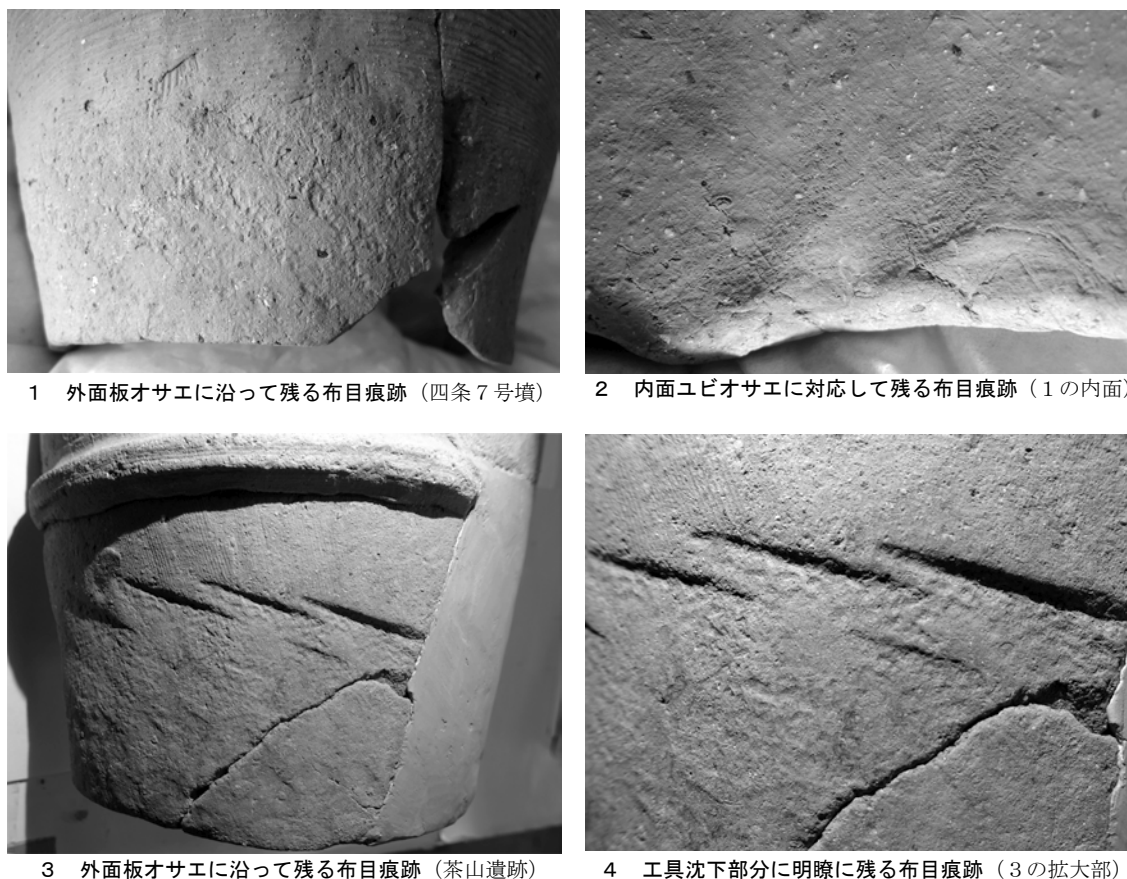


Fig. 7 底部調整にともなう布目痕跡

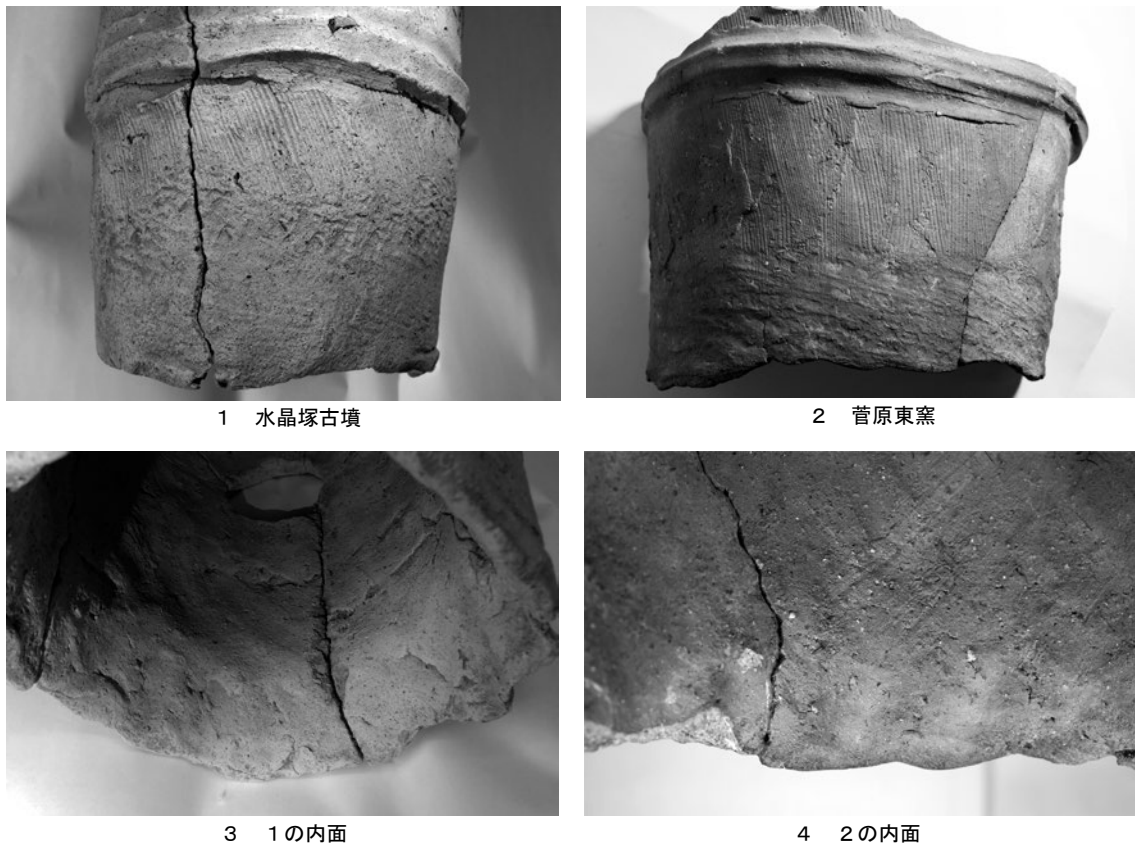


Fig. 8 後期新相段階の底部板オサエ調整

コハケの施工率は9割以上と高く、突帯は大部分が断続ナデによる貼付技法を用いない突帯Ⅰ群である。10cm前後の底部高・突帯間隔、Ⅰ類3b式の靱形埴輪（和田2012）などの特徴から、Ⅳ期新相に位置づけるのが妥当である。共伴須恵器もTK208～23型式とされ、Ⅴ期古相の四条2号墳や8号墳よりも相対的に古く位置づけられる（鈴木編2010）。

前述のように、出現期の底部調整は定式化以降のそれよりも手数をかけて丁寧に施される。奈良盆地の場合、従来、初期の底部調整として内面のケズリ調整のみが強調されてきたが（坂2007、村瀬2018a）、実際には出現期の底部調整では、板オサエやナデと複合することで、視認が困難な各面のケズリ調整も一定量存在するものと推測される。従来、強調されてきた内面のケズリ調整は、各種底部調整技法のなかで最も簡易な一手法に過ぎない。後述のように、奈良盆地ではⅤ期中・新相段階でも内面ケズリが一定量残存するが、それらは生産が恒常化し系統分化が進むなかで、底部調整技法の複合化が解消し、当初は各種技法中の一手法であった内面ケズリ技法がそれ単独で施されるようになった姿を捉えたものと理解できる。ケズリ調整の存在が稀薄とされる古市古墳群でも、藤井寺市林10・13号墳では、不明瞭ながら板オサエやナデと重複して底部下端や底面にケズリの痕跡が散見できる（Fig. 5-8）。技法が複合化している点は奈良盆地と同様であり、出現時期も両者で大差ないものとみられる。

その時期は上述のように四条7号墳がⅣ期新相（TK208型式期）であり、古市古墳群では同様にB種ヨコハケの施工率が高く、突帯もⅠ群である林10号墳がこれに併行する。この段階では、変形が加えられながらも底面が当初の水平面をとどめる例が多いが、続くⅤ期古・中相（TK23・47型式期）では全体

的に調整が粗雑化することで底面の原形が失われ、かろうじて外傾する面としてその存在をとどめる事例が増加する。同時に技法の複合化が解消にむかい、板オサエ単独、板オサエ+内面ケズリ、内面ケズリ単独といったかたちで、それぞれの調整方式が手順として確立していく。V期新相（MT15・TK10型式期）では、さらに調整の粗雑化と手法の淘汰が進行し、板オサエ単独での調整が主体となる。底面が完全に潰されて大きく波打ち、断面は完全な尖底を呈するものが増加する（Fig.8）。ただし奈良盆地では、生産拠点の林立により、底部調整の方式には細部で系統差も認められるが、この点は後に詳述する。

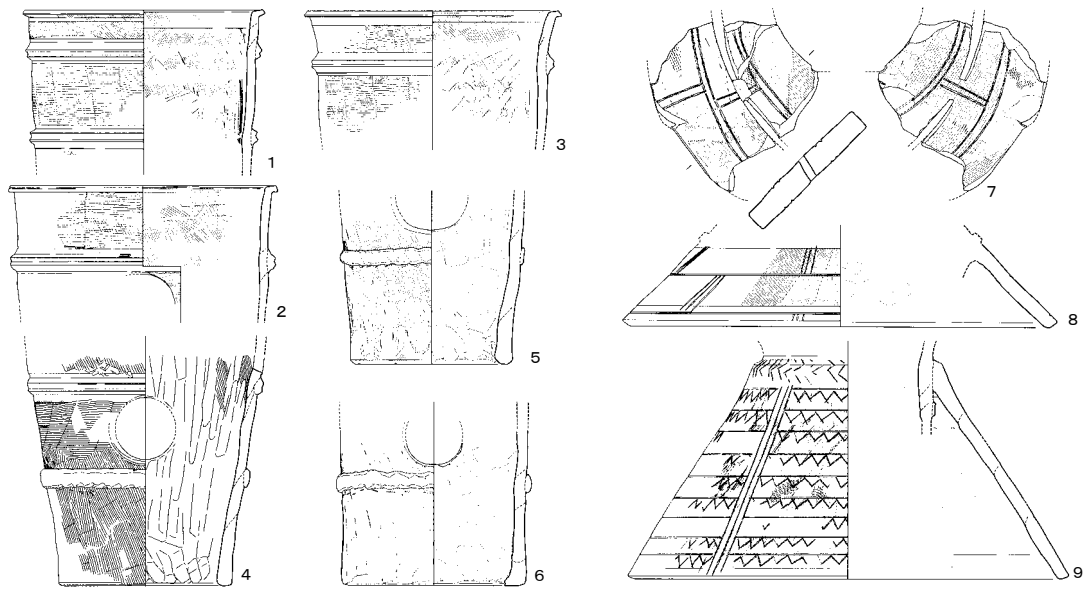
4 V群円筒埴輪の成立過程

以上のような突帯製作、底部調整双方あり方からあらためてV群円筒埴輪の出現を見定めると、突帯は断続ナデによる貼付けと板オサエ整形による突帯II群を基本とし、底部調整は施工頻度が高まり、その手順も確立してくる段階、須恵器編年ではTK23型式期にその時期を求めることができる。ただしこの段階では、B種ヨコハケが高い施工率を維持するとともに、突帯割付の凹線技法が一定量残存するなど、IV群の特色が色濃く残っている。なによりも、上記のような特徴は4条5段以下の小型品を中心とする変化であり、当該期中・大型品は小型品以上にIV群の特徴が濃厚に残存するものと推測される。すなわち、埴輪製作の粗雑化は小型品が若干先行し、その内容がやや遅れて大型品に反映されていく流れであると予想される。その経過をIV期段階にさかのぼって辿ってみよう。

着目するのは、藤井寺市西清水2号墳である（Fig.9-1~9）。IV期段階の古市古墳群では墳丘規模に応じて大・中・小の規格の作り分けがあり、ヨコハケの盛行頻度など、それぞれの技術的内容にも差異がある可能性が早くから指摘されてきた（天野・松村1992）。しかしながら、大小の古墳が密集する古市古墳群内では、埋没古墳からまとまった資料が出土しているものの、周溝出土資料の規格の組合せに対しては常に混入の可能性を考慮せざるを得ないこともあり、規格の異なる埴輪間の具体的な関係については定見が得られていないのが実情である。

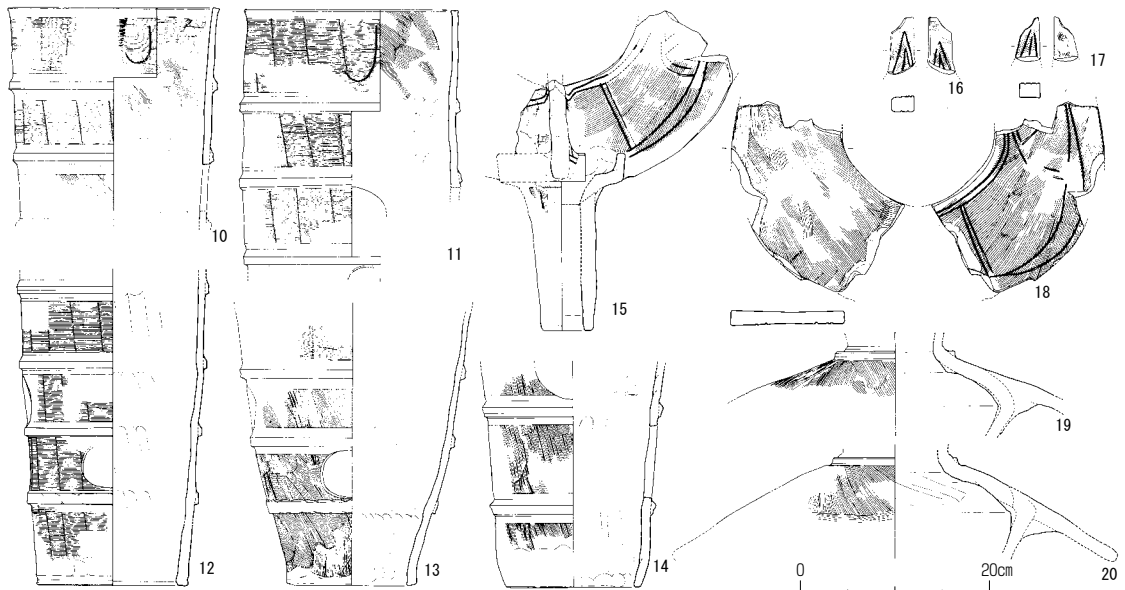
西清水2号墳もその例に漏れず、周溝とされるSD01から大量の埴輪が出土しているが、このうち胴部径が30cmを超える中型品（報告書№18~21）、覆輪を有する三角板革綴短甲を表現した甲冑形埴輪（報告書№93~98）、蓋形埴輪の肋木片（報告書№77）は、胎土の素色が褐色で混和剤に金雲母・石英が目立つ点、黒斑を有する点が他の主要な埴輪群と異なっており、残存率も低いことから混入品の可能性が高い。円筒埴輪の主要なものは、底部径18cm前後、口縁部径27cm前後の小型品で、最下段突帯はユビオサエで貼付ける突帯I群で、板押圧の後のヨコナデを省略する無調整突帯が高頻度で含まれる。木村理により同工品分析が実施されており、上記のような特徴をもつ円筒埴輪と朝顔形埴輪や蓋形埴輪、草摺形埴輪との間で同工品が確認されている（木村2017）。ちなみに、先に混入の可能性を指摘した中型品の円筒埴輪・形象埴輪との間には同工品や同ハケ関係は認められていない。

この西清水2号墳の年代的位置づけであるが、I群無調整突帯を大量に含むことから新しい印象を抱くが、底部高は12cm前後、突帯間隔は9cm前後で、突帯間隔はやや狭いものの、底部高が突帯間隔を3cmほど上回る点、IV期古相の誉田御廟山古墳やアリ山古墳、百舌鳥御廟山古墳にみられるような口縁部高が著しく短いタイプ（5cm前後）が含まれる点は、古い様相といえる。さらに木村が主要な円筒埴輪



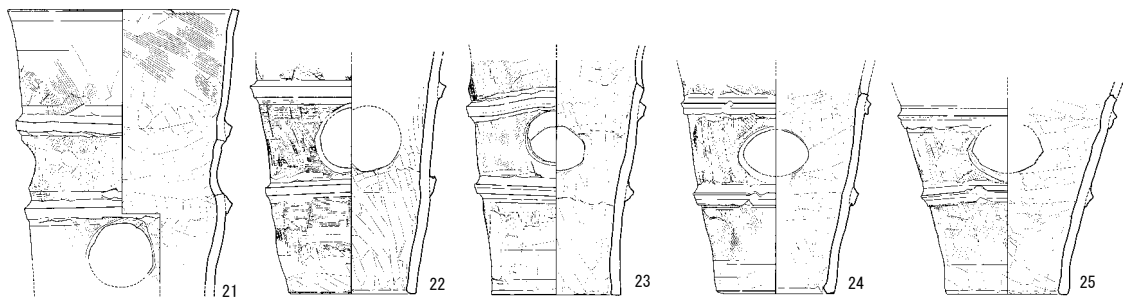
突帯 I 群 (無調整出現) 底部調整なし

藤井寺市西清水 2 号墳 IV期中相



突帯 I 群 (無調整含む) 底部調整有

藤井寺市林 10 号墳 IV期新相



突帯 II 群 底部調整有

藤井寺市林 13 号墳 V期古相 (V群円筒埴輪成立)

Fig. 9 小型品にみるV群円筒埴輪の成立過程 1:8

との間に同工品を見出した蓋形埴輪や草摺形埴輪は混入の可能性を完全に否定できる資料であるが、蓋形埴輪は笠部の布貼を2本沈線で表現する中期の典型的な型式であり、笠部が無文のものが増加するIV期新相まで下らせるのは困難である。草摺形埴輪も間帯を挟まずに鋸歯文を全面に充填する特徴は、七観古墳や弁天山D3・4号墳などIV期でも相対的に古い古墳に類例が求められる。以上を総合的に評価するならば、IV期中相に位置づけるのが妥当であろう。

大・中・小の規格の異なる円筒埴輪については、従来、無批判に底部高・突帯間隔の値でもって併行関係が模索されてきたが、器財埴輪の編年観も加味して位置づけた西清水2号墳のIV期中相という評価は、結果的に底部高については大山古墳などIV期中相の大型品の値と共通することになる。ただし、9cm前後の突帯間隔については同時期の大型品よりはやや狭いため、突帯間隔のみで併行関係を検討することの困難さが露呈することとなる。さらに注意を要するのは、上述のように西清水2号墳では最下段突帯に板押圧整形による無調整突帯が多数含まれる点である。IV期中相段階の大型品では、ごく少量ながら最下段突帯のヨコナデが粗雑化するものが出現し、端面を中心に板押圧の痕跡が散見されるようになるものの、完全にヨコナデ調整を省略するものは姿を現しておらず、土師ニサンザイ古墳、前の山古墳、市野山古墳など、IV期新相段階に至って顕在化し始める。このように、西清水2号墳の位置づけの検討結果からは、突帯製作の粗雑化は小型品が先行し、大型品では、一段階程度遅れてその内容が波及するという関係を導き出すことができる。

そしてこの西清水2号墳に後出するIV期新相段階の小型品の標識的な資料が前述の林10号墳ということになる。突帯は同様にI群で板押圧後のヨコナデを省くものが一定量含まれるが、底部高は9cm前後、突帯間隔は8cm前後と西清水2号墳よりも規格が縮小し、口縁部高は突帯間隔と一致せず、長く伸長する例が増加する。それとともに、ケズリ・板オサエ・ナデ等が複合化した初期の底部調整の採用が確認できるのである（Fig. 9-10~20）。その時期は前述のようにIV期新相（TK208型式期）に位置づけられる。この時期、大型品では、底部高・突帯間隔の値は9cm前後となり、板押圧整形の無調整突帯が一定量含まれるようになる点で小型品との相違が解消したかに見えるが、底部調整の導入には至っていない。底部調整も大型品に先行して小型品において顕在化していく流れが追える。

さらに古市古墳群では、林13号墳（Fig. 9-21~25）や羽曳野市茶山遺跡平成6年度調査出土の小型品がこれに後続する。断続ナデで貼付ける突帯II群が新たに出現し、底部調整の頻度が上昇し、その手順も安定化してくる。突帯II群、底部調整というV群を特徴づける指標が出そろったこの段階をもって、V群円筒埴輪の成立を捉えることができよう。IV期新相の林10号墳とV期古相の林13号墳のB種ヨコハケの施工率を比較すると、前者が6割程度、後者が3割弱である。V期古相の段階ではB種ヨコハケが一定の施工率を維持しているものの、時間の経過に沿って徐々に低下していく方向性がうかがえる。

以上のV群円筒埴輪の成立過程については、後述のように奈良盆地においてもほぼ同じ歩みを辿ったものと理解できる。注意を要するのは、繰り返し述べるように、ここで確認したIV群からV群円筒埴輪の成立過程は小型品の変化を跡付けたに過ぎず、同時期の大型品では、小型品の変化を追うように新たな技術が受容されていく一方で、一部ではIV群の製作技術が長期にわたって維持されていく点である。埴輪生産の終焉に至るまで、大型品と小型品の製作時の距離は完全には解消していない可能性が高く、この点の実態解明にむけてさらに検討を深める必要がある。

従来、V期の開始をめぐっては、その背景としての生産体制の再編成が強調され、「断続ナデ技法」に象徴される技術的画期性が評価されてきた（鐘方1992）。しかしながら、仮に小型品に論点を絞ったとしても、IV群からV群への移行は、前述したようにこれまでの認識以上に極めて漸移的であり、その間に技術上の断絶を見出すことはできない。IV群からV群への変化の本質は、大量生産に起因する製作時間の短縮化と技法の粗雑化にあるとみて間違いはない。V期開始時にはIV群の製作技術が色濃く残存し、生産地ごとの技術的相違もさほど顕著ではないことから、断続ナデ技法のような特定の技法の出現やその分布上の差異に過度の政治性を見出すべきではなからう。

ただし、佐紀古墳群や馬見古墳群のような階層構成型古墳群の造営停止、それと表裏一体での各所への拠点的生産地の設置がV期の開始に呼応するとする見方（鐘方1992）には異論がない。後述のように、V期を通じた各所での生産の継続が緩やかながら系統差を生み出していくことになる。

5 V群円筒埴輪の変遷

本章の総括にかえてV群円筒埴輪（小型品）の変遷観を簡潔に整理しておく。従来、筆者はV期を古相・新相の2小期に区分してきたが（廣瀬2011）、やや理念的ながらここでは古・中・新相の3小期に細分する案を提示したい。

V期古相 突帯は断続ナデで貼り付けるII群が出現するが、IV期以来の突帯I群も引き続き残存しており、凹線技法や板オサエ整形といった突帯I群の製作技法をそのまま継承する突帯II群が普遍的に存在する。底部調整は、外面板オサエを基本としつつ、IV期新相以来の内外面下端や底面のケズリ調整、およびそれらの各手法を複合的に用いる事例が存続する。外面調整は、2段目以上の上位の段を中心にB種ヨコハケ調整が未だ高い頻度で残存する。須恵器編年ではTK23型式期に相当する。

V期中相 突帯製作はV期古相のあり方を継承しつつも、最下段突帯では断続ナデによる貼付→板オサエ整形→無調整の突帯II群が出現する。底部調整は、底面の原形が失われ、かろうじて外傾する面としてその存在をとどめる事例が増加する。それとともに技法の複合化が解消にむかい、板オサエ単独、板オサエ+内面ケズリ、内面ケズリ単独といったかたちで、それぞれの調整方式が手順として確立する。外面調整はB種ヨコハケの施工率が著しく低下するが、口縁部などに限定的に施される例も残る。須恵器編年ではTK47～MT15型式期に相当する。

V期新相 突帯II群では、板オサエ整形の省略化が進み、最下段突帯では断続ナデによる貼付→無調整の典型的な断続ナデ技法Bが出現する。底部調整は手法の粗雑化と淘汰が進行し、板オサエ単独での調整が主体となる。底面が完全に潰されて大きく波打ち、断面は完全な尖底を呈するものが増加する。外面調整は一次のタテ・ナナメハケのみで、B種ヨコハケの施工がみられなくなる。須恵器編年ではMT15～TK10型式期に相当する。

以上は、V群円筒埴輪の小型品における変遷の全体像を示したもので、実際には無調整突帯を採用しない系統も存在するなど、細部の位置づけには十分対応していない部分もある。この点については、次章での各系統の解説で補足することにする。